

PRESS RELEASE

【報道関係各位】



山王美術館コレクションでつづる

エコール・ド・パリ展

2025.3.1sat ▶ 7.31thu

ローランサン ユトリロ モディリアーニ パスキン 藤田嗣治 キスリング

L'Ecole de Paris from Sanno Art Museum

モイズ・キスリング《庭園の裸婦》(部分)1947年、山王美術館

山王美術館
SANNO ART MUSEUM

20世紀はじめ、「芸術の都・パリ」には、世界各地から多くの芸術家が集いました。若き芸術家たちは、モンマルトルの「バトー・ラヴォワール（洗濯船）」や、モンパルナスの「ラ・リュージュ（蜂の巣）」といったアトリエ集合住宅に集住し、交流を深めながら制作に励んだのです。

のちに「エコール・ド・パリ」と呼ばれた一群の芸術家たち。その多くは、フランス国外からパリへと渡り、モンパルナスを中心に集まった画家・彫刻家たちでした。ロシアのシャガール、スーティン、イタリアのモディリアーニ、ブルガリアのパスキン、ポーランドのキスリング、日本の藤田嗣治、さらにフランス人画家のユトリロやローランサンらが代表的な画家とされます。彼らは、特定の流派や美術運動のように、明確な芸術理論や主義のもと制作にあたったわけではありません。しかしながら、フォーヴィスムやキュビズムをはじめとする新たな芸術様式や理論に刺激を受け、ときにはアフリカをはじめとする原始美術をも着想源としつつ、それぞれが母国の伝統や民族性に根ざした独自の表現を探究していきました。1920年代に最盛期をむかえ、第二次世界大戦により実質的な終焉を迎えますが、エコール・ド・パリの画家たちにより、多様かつ豊かな芸術がパリに花開いたのです。

本展では、山王美術館コレクションの中より、ローランサン、ユトリロ、モディリアーニ、パスキン、藤田嗣治、キスリングらの作品を展示いたします。

ポイント① エコール・ド・パリを代表する6人の画家がおりなす多彩かつ独創的な絵画の世界

ふたつの大戦のはざま「レ・ザネ・フォル（狂騒の時代）」に花開いたエコール・ド・パリ。

芸術の都・パリに世界各地から集った若き画家たちは、アカデミックな規範や様式から解放され、フォーヴィスムやキュビスムをはじめとする新たな芸術様式に刺激を受けながらも、画家自らの芸術表現を模索していきました。

＊グレーの諧調に淡い色調、やわらかな筆づかいによる優美な女性像のローランサン。

＊哀感ただようパリの街並みを描きつづけたユトリロ。

＊細長く引きのばされた人体、官能的な裸婦像と独特のスタイルを確立したモディリアーニ。

＊「真珠母色」と称された淡い色彩とふるえるような線描が印象的なパスキン。

＊なめらかな白いカンヴァスに細くしなやかな線描を生かした独自の画風で人気を得た藤田嗣治。

＊鮮やかな色彩のコントラストと、つややかな質感をもつマティエールが特徴的なキスリング。

エコール・ド・パリを舞台に、独自のスタイルを確立したローランサン、ユトリロ、モディリアーニ、パスキン、藤田嗣治、キスリングらの絵画約30点を展示いたします。

ポイント② 新コレクション13点を初展示

近年収蔵した、ローランサン5点、ユトリロ1点、モディリアーニ1点、パスキン1点、藤田嗣治2点、キスリング3点の絵画を本展にて初公開いたします。

ポイント③ 「ここでしか会えない芸術作品」

山王美術館では、2009年のオープン以来、コレクションのみによる展覧会を開催してきました。本展で展示する作品の何れもが、「ここでしか会えない芸術作品」です。本展を通じて、山王美術館コレクションの新たな魅力に触れていただければ幸いです。

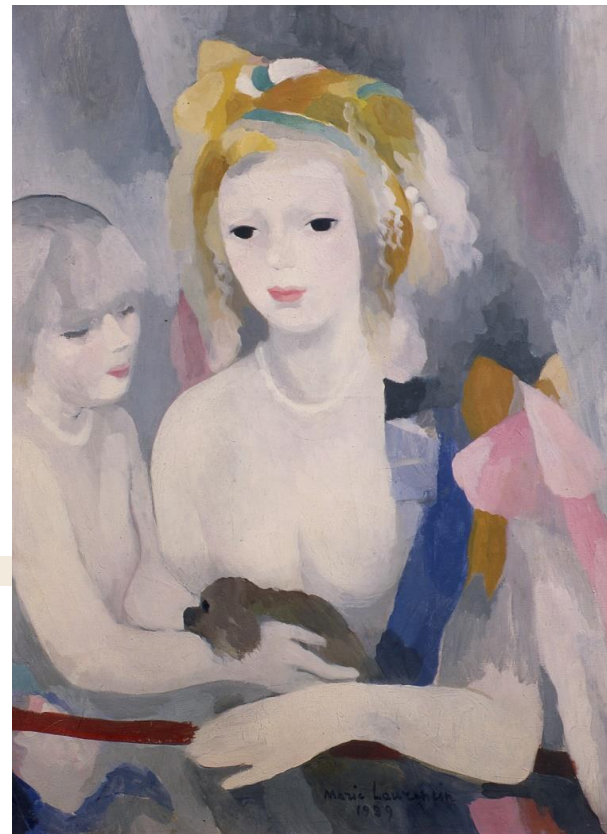
Marie Laurencin

1883-1956

マリー・ローランサン

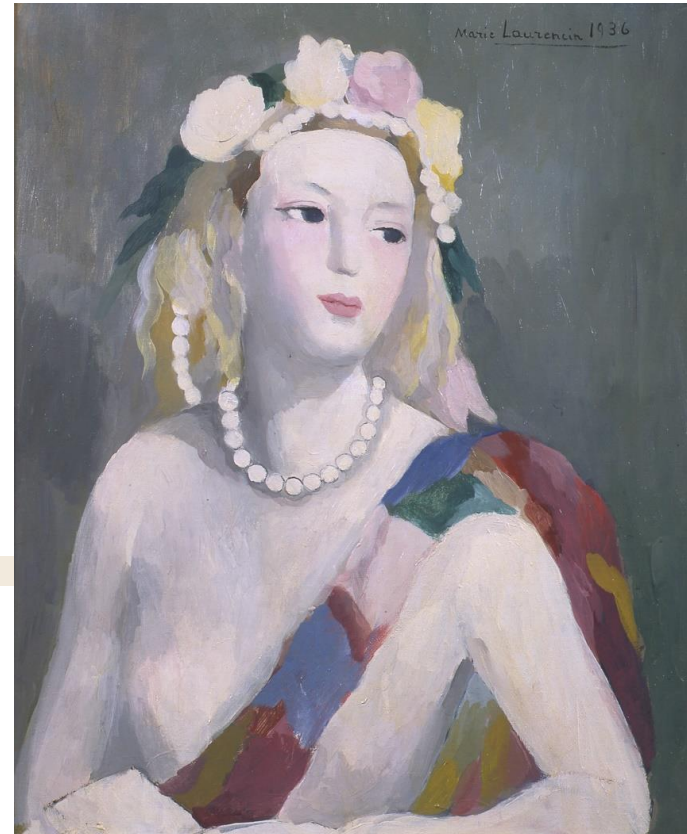
パリに生まれ、同地にて没。
本格的に絵画を学ぶため私塾アカデミー・アンペールに入る。ここでブラックと出会い、ピカソをはじめとするバトー・ラヴオワール(洗濯船)に住む前衛芸術家たちと親交を結ぶ。1907年、ピカソの紹介で詩人アポリネールと知り合い、恋愛関係になる。1914年に、ドイツ人男爵と結婚し一時ドイツ国籍となったが、1921年に単身パリへと戻り、離別。ふたたびフランス国籍となる。1921年、戦後初の個展が成功をおさめる。1923年に描いた肖像画が評判をよび、上流階級の婦人たちからの注文が相次ぎ、社交界においても人気を博す。パステルカラーの色彩とやわらかな筆づかいによる独自の画風をつくりあげた。

初展示



【広報用画像①】

マリー・ローランサン《少女たち》1929年
山王美術館



【広報用画像②】

マリー・ローランサン《真珠で装うエヴァリン》1936年
山王美術館



【広報用画像③】

モーリス・ユトリロ《サン＝リュスティック通り(モンマルトル)》
1919年頃、山王美術館



【広報用画像④】

モーリス・ユトリロ《雪のサン＝リュスティック通り(冬のサクレクール)》1940年頃、山王美術館

初展示

パリに生まれ、ダクスにて没。
ルノワールやロートレックのモデルを務め、後に画家として活躍したシュザンヌ・ヴァアドンの私生児として生まれる。パリに住む母親と離れ、パリ郊外の祖母のもとで育てられた。12歳よりパリ市内の中学校に通うが、アルコール依存症の兆候などにより1900年に退学。その後、強度の飲酒ぐせを治療するために入院するが、何度も入院退院を繰り返すこととなる。絵画を描き始めたのは治療の一環として医師から勧められたためであり、正規の美術教育は受けることなく、独学のままであった。モンマルトルを中心にパリの街並みを描きつづけたが、1908年ごろからは实景に即してではなく、アトリエにて絵葉書や写真を用いて描くようになる。個展が成功をおさめた1919年ごろより評価が高まり、「エコール・ド・パリ」の代表的な画家のひとりとなった。

Maurice Utrillo

1883-1955

モーリス・ユトリロ

Amedeo Modigliani

1884-1920

アメデオ・モディリアーニ

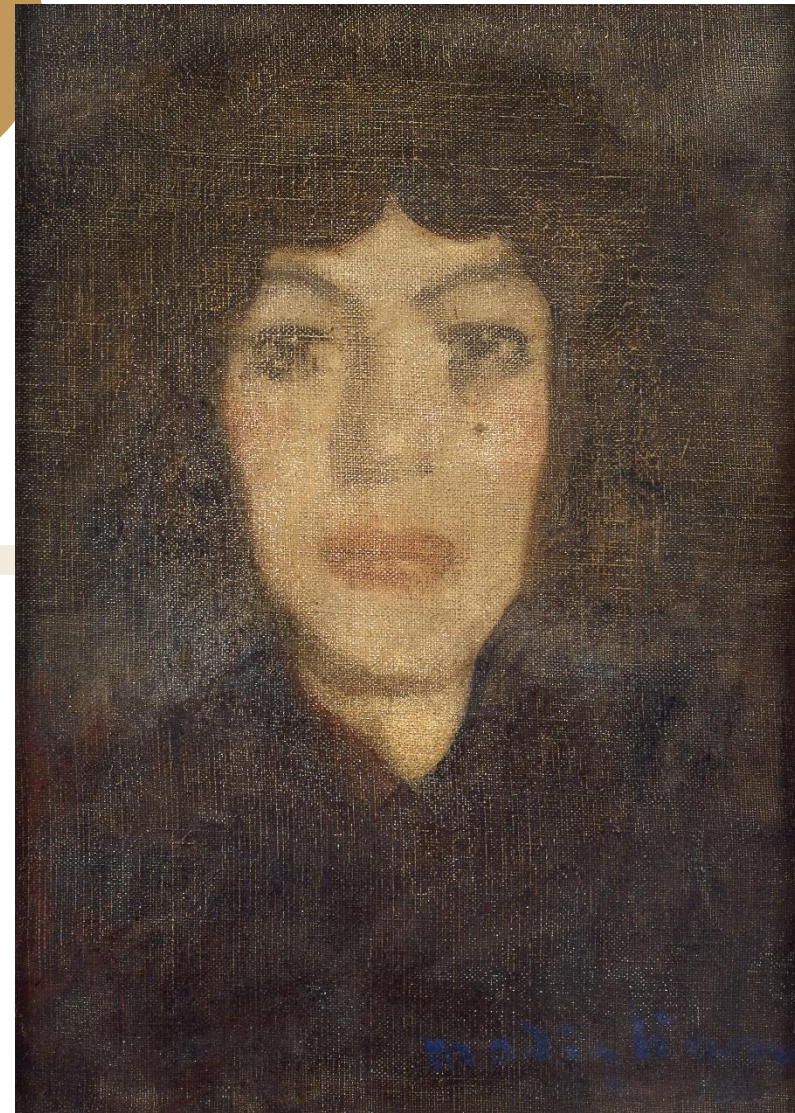
イタリアに生まれ、パリにて没。
イタリア・トスカーナの港町リヴォルノのユダヤ人家庭に生まれる。生来病弱であり、11歳から16歳にかけて胸膜炎、腸チフス、結核を患う。15歳より、本格的に絵画の道を志し、母国にて絵画・彫刻を学ぶ。1906年、パリに移住。モンマルトルやモンパルナスに住み、藤田嗣治、キスリングらと交流する。1909年、彫刻家のブランクーシと出会い、石彫に打ちこむが、健康上・経済的な理由により断念。1914年ごろより再び絵画へと転向する。細長く引きのばされた人体を特徴とする独特の様式を確立。。1917年に初の個展を開催するが、意欲的に取り組んだ裸婦像が物議をよぶ。飲酒や麻薬により身体を蝕まれ、健康状態が急激に悪化。意識不明の状態で発見され、パリの慈善病院にて短い生涯を閉じた。

初展示

初展示

Close-Up

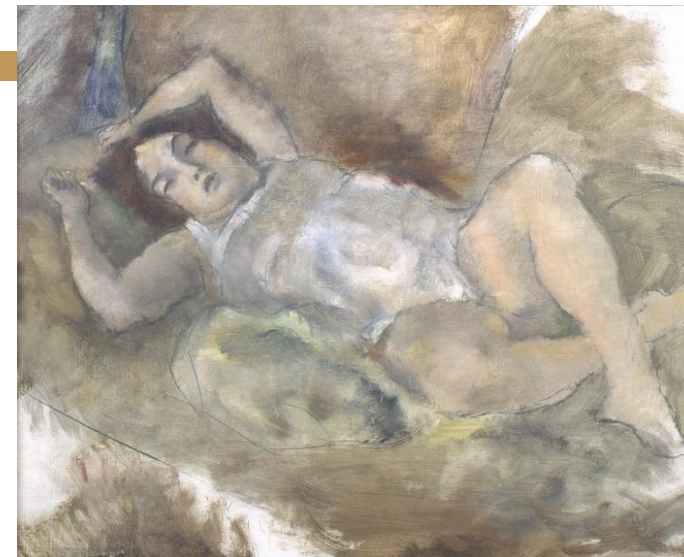
モディリアーニ最初のコレクター、ポール・アレクサンドルの旧蔵品です。1906年1月にパリへと移ったモディリアーニ。パリ最初期の作品は、転居をくりかえすごとに廃棄され、ほぼ残されていませんが、モンマルトル界隈の住まいを転々とするなかでも本作は持ち歩いていた。1907年11月に会ったポール・アレクサンドルの誘いに応じ、デルタ通りの芸術家コロニーへと画材一式を移し、その後、モディリアーニ自身の手でデルタ通りへと本作も持ちこまれました。
のちのモディリアーニ作品とは全く異なる表現方法による女性像。カンヴァスが透けてみえるほどに薄く溶かれた絵具を用いながらも、暗い背景にやわらかく色彩が調和し、描かれた女性には確かな実在感を伴っています。制作時期は1906年から1907年頃、パリに到着して間もなくの頃、もしくはパリに渡る以前のイタリアで描かれたとされています。



【広報用画像⑤】
アメデオ・モディリアーニ《ほくろのある女性》
1906-1907年頃、山王美術館



【広報用画像⑥】
ジュール・パスキン《コートのマリネット》1927年
山王美術館



ジュール・パスキン《横たわる裸婦》1929年
山王美術館

ブルガリアに生まれ、パリにて没。
両親はともにブルガリア系のセファルディム(スペイン系ユダヤ人)であった。ウィーンにて中等教育を修めたのち、ブダペストとウィーンさらにミュンヘンにて美術教育を受ける。素描の才を認められ、1904年にはドイツの風刺雑誌『ジンプリツィスム』の挿絵画家として専属契約を結ぶ。掲載にあたって父親からの要求により、本名の「Pincas(ピンカス)」の綴りを並びかえた「Pascin(パスキン)」をサインとして用いるようになる。1905年にパリに出て油彩画に取り組みはじめる。1907年ベルリンで個展、1913年にはニューヨークで開催された「アーモリー・ショー」に出品し好評を博す。第一次世界大戦中は戦火を避け渡米、アメリカ国籍を得た。1920年10月にパリに戻り、モンマルトルに居をかまえながらモンパルナスに通い、キスリング、藤田らと交友する。この頃、うすく溶いた絵具による淡く虹色を帯びた色彩と、ふるえるような細い線描が融合した独自の画風を確立、「真珠母色の時代」と称された。退廃的な生活の末、個展開催を直前に控えた1930年6月2日にアトリエにて自ら命を断つ。葬儀当日の6月7日、パリ中の画廊が店を閉じ、画家に弔意を表した。

Jules Pascin

1885-1930

ジュール・パスキン

Léonard Foujita

1886-1968

藤田 嗣治

東京生まれ、チューリッヒにて没。1905年東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科へ入学、1910年に同校を卒業。1913年にフランスへと渡り、ピカソら前衛的な画家たちと交流する傍らで古典美術を研究。1919年のサロン・ドートンヌでは、初出品作6点がすべて入選するという快挙をなし、会員となる。やがて「乳白色の下地」による独自の技法を見出し、1921年のサロン・ドートンヌに出品。その後、審査員に推挙され、エコール・ド・パリの一員として輝かしい名声を得る。1931年に中南米へと渡り、1933年に一時帰国。1939年に再渡仏するが、第二次世界大戦の勃発により、翌年帰国する。戦後1950年にニューヨークを経由し渡仏。1955年にフランス国籍を得、1959年にはカトリックの洗礼を受ける。洗礼名はレオナール。以後、作品には「L.Foujita」または「Léonard Foujita」とサインする。晩年は宗教的主題や子供を多く描き、自ら設計したランスの礼拝堂のフレスコ画制作に取り組んだ。

Close-Up

エコール・ド・パリを代表する画家として人気を博した藤田嗣治ですが、1930年に始まる中南米への旅を通じて、画風が大きく変化し、新たなスタイルへと移行していきます。最初の滞在地リオ・デ・ジャネイロにて描かれた本作は、ターコイズブルー、濃密な赤、黄色と黒と、鮮やかな色彩で構成されています。濃密な色彩とマチエールを強調した表現は、1920年代の「乳白色の下地」とは、まさに対照的。日本はもちろん西欧圏とは全く異なる気候と日差しのなか、風土や風俗に根差した色彩を鋭敏につかみとり、カンヴァス上に再現することを積極的に試みたことがうかがえます。4か月におよぶブラジル滞在中、藤田とマドレーヌを温かく迎えたのは、パリにて交流があったブラジル人画家カンディナード・ポルティナーリ夫妻でした。この滞在中に、ポルティナーリは、画布や線描・色彩など藤田の強い影響を受けたとされます。右上の「à Portinari」の署名にみられるとおり、ポルティナーリへと贈られた作品です。



【広報用画像⑦】

藤田嗣治《二人の女性と船員》1932年、山王美術館
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2024 G3546

【広報用画像⑧】

藤田嗣治《横たわる裸婦》1927年、山王美術館
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2024 G3546

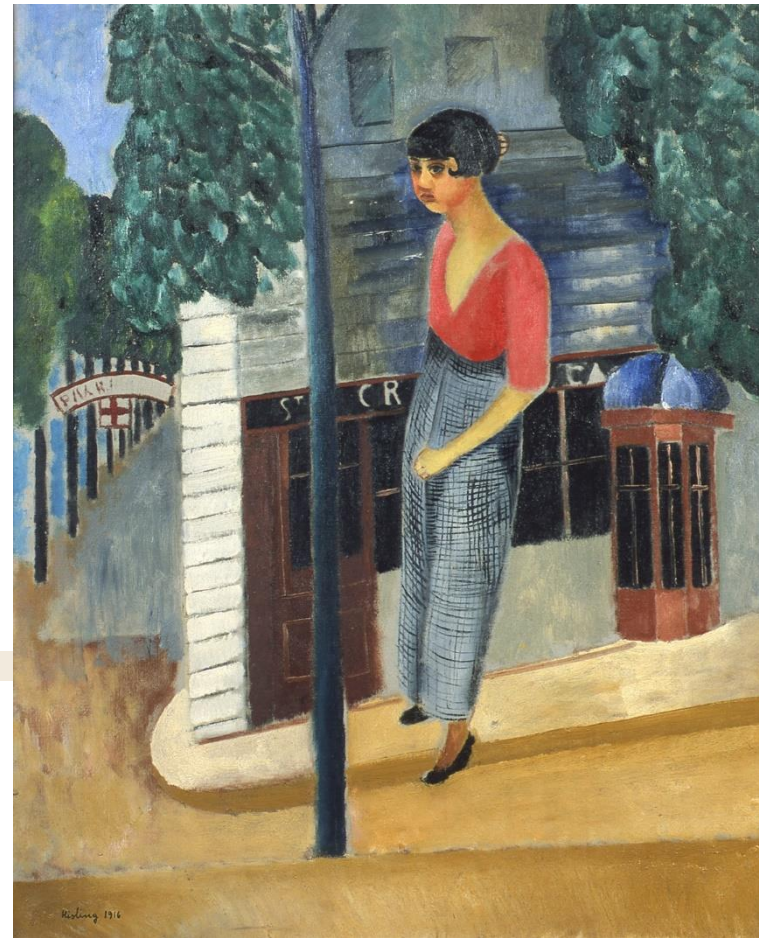
初展示

Moïse Kisling

1891-1953

モイーズ・キスリング

ポーランドに生まれ、南フランス サナリーにて没。
ポーランドのクラクフにユダヤ人として生まれる。同地の美術学校で絵画を学ぶ。1910年パリに出て後は、ピカソやブラック、モディリアーニらと親しく交流。エコール・ド・パリを代表する画家として活躍。誠実で社交的な性格から、そのアトリエには多くの芸術家が集った。第一次世界大戦では自ら志願し外人部隊に従軍。その軍功によりフランス国籍を取得する。第二次世界大戦中はアメリカに亡命し、フランスに残留した芸術家たちの支援活動にも積極的に関わる。大きな瞳をもつ女性像は、憂いをおびた表情をもつとともに官能性をそなえており、鮮やかな色彩のコントラストと、つややかな質感をもつマティエールが特徴的である。

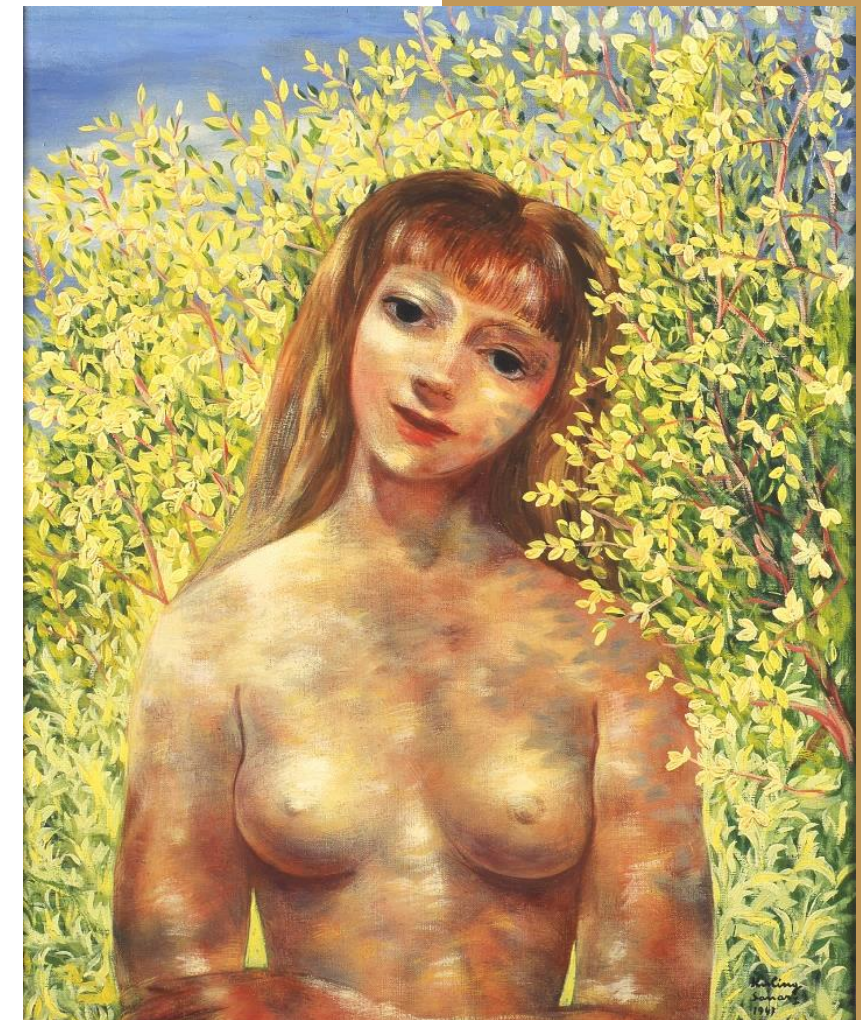


3点共に
初展示

【広報用画像⑨】上
モイーズ・キスリング《路上の女性》1916年、山王美術館

【広報用画像⑩】右下
モイーズ・キスリング《庭園の裸婦》1947年、山王美術館

【広報用画像⑪】左下
モイーズ・キスリング《ドリー》1933年、山王美術館



「エコール・ド・パリ展」によせて 日本画コレクション ～ 海を渡った日本画家たち ～

「エコール・ド・パリ展」によせて、5階展示室では西洋へと渡った日本画家の作品をご紹介します。

明治維新後、海を越え欧州へと渡ったのは洋画家だけではありませんでした。第一次世界大戦後、パリへと留学する日本人美術家の増加に伴い「現代の日本画」を欧州にて展覧する機会も生まれてきます。1922年、パリのグラン・パレにて日本美術展が開催され、明治以降の日本画がはじめてフランスで公開されます。以降、翌年にはサロン・ドートンヌ・日本部門開催。1929年に開催された「日本美術展—現代の古典派」では、200点におよぶ近代の日本画が出品。さらに1930（昭和5）年にはローマにて日本美術展を開催。横山大観が総代を務めたこの展覧会では、日本の宮大工により床の間が再現された会場で、院展・帝展の画家80人による作品が展示され、16万人を超える来場者となりました。さらに、欧州各地へと遊歴・留学する日本画家も現れます。日本画家たちもまた西洋美術を受容しつつ、日本画の近代化を模索したのです。

本展では、横山大観、川合玉堂、橋本関雪、前田青邨、東山魁夷、堂本印象、杉山寧、片岡球子、川端龍子、棟方志功らの作品を展示いたします。



（上）横山大観《煙寺版鐘図》1929年、（左）横山大観《嵐山》1939年頃、（右上）橋本関雪《進馬の図》、

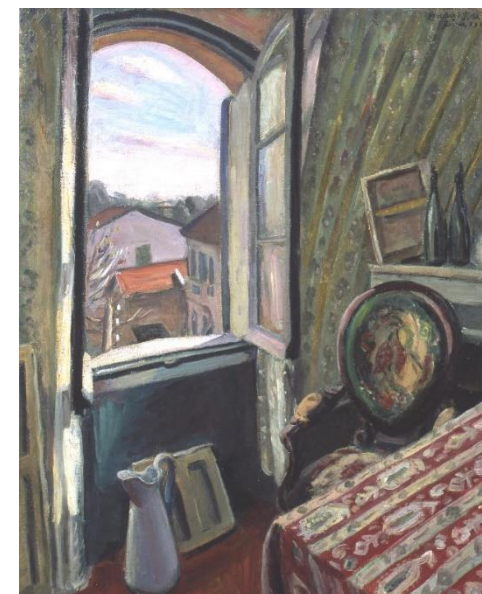
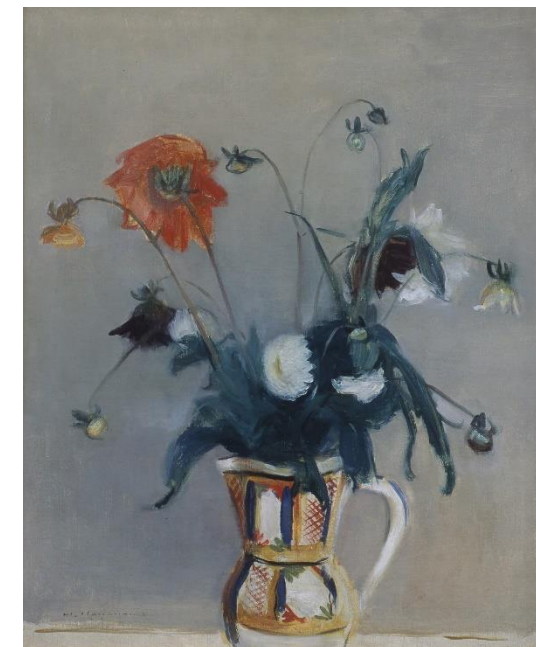
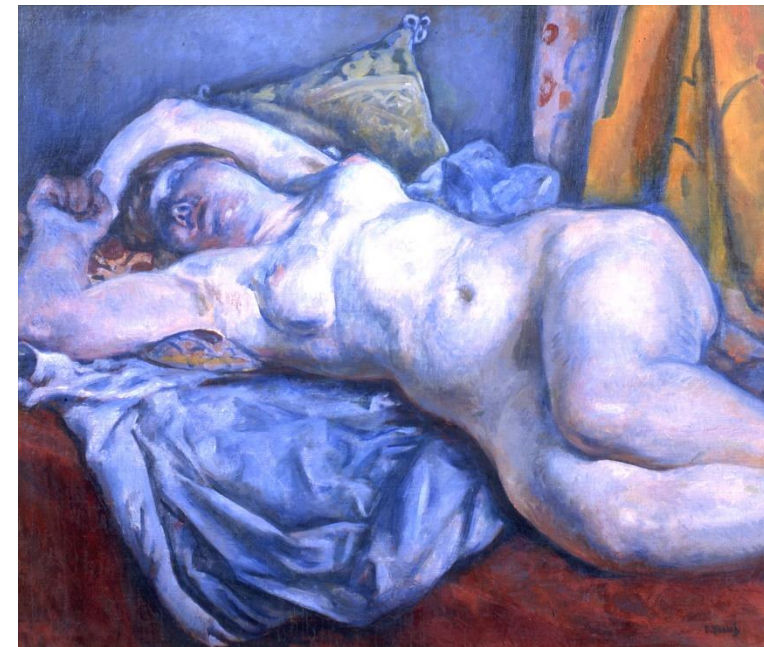
（右下）川端龍子《花王図》、すべて山王美術館

「エコール・ド・パリ展」によせて 日本洋画コレクション ～ 憧れの地・パリに留学した日本人洋画家たち ～

「エコール・ド・パリ展」によせて、3階展示室では1910年代から20年代にかけてパリに留学した洋画家の作品を中心にご紹介いたします。

西洋技術を輸入すべく設立された工部美術学校にて、1876年より本格的な西洋絵画の教育が始まります。しかしながら性急すぎる政府の欧化政策に反発し、国粹主義の機運が高まるなか、1880年代に入ると洋画排斥の傾向が強まり、工部美術学校も廃校。1889年開校の東京美術学校に西洋画科は設置されませんでした。同校にようやく西洋画科が開設されたのは、1896年のことです。以降、岡田三郎助らが文部省留学生として西洋画研究のためフランスに派遣され、その後も多くの日本人画家がパリを目指すようになりました。1930年前後には200人におよぶ日本人美術家が在住し、彼らはサロンへの出品を試みるだけでなく、日本人会主催による展覧会を定期的に行いました。さらに憧れの地パリで学んだ画家たちが次々と帰朝し、最新の画風や美術思潮をもたらすことで、日本の美術界はより一層深化し、西洋の模倣にとどまらぬ日本的な油絵様式の確立が目指されたのです。

本展では、梅原龍三郎、安井曾太郎、金山平三、小出樞重、坂本繁二郎、岡鹿之助、向井潤吉、佐伯祐三、荻須高德、山口長男、小磯良平らの絵画を展示いたします。



(左上)安井曾太郎《横たわる裸婦》1912年、(右上)金山平三《ダリア》、(左下)小出樞重《窓》1922年、

(右下)佐伯祐三《パリの街角》1927年頃、すべて山王美術館蔵

展覧会概要

- 展覧会名 山王美術館コレクションでつづる
エコール・ド・パリ展
- 会期 2025年3月1日（土）-7月31日（木）
- 休館日 火曜日・水曜日（ただし、4月29日、5月6日は開館）
- 開館時間 10時～17時（入館は16時30分）
- 会場 山王美術館

〒540-0001
大阪府大阪市中央区域見2丁目2番27号
TEL 06-6942-1117
H P <https://www.hotelmonterey.co.jp/sannomuseum/>
- 入館料 一般 1,300円
大学・高校生 800円
中学生以下 500円（保護者同伴に限り2名様まで無料）
＊学生証をご提示ください。
- 広報用画像 「ARTPR 展覧会情報」からも、
広報用画像の申請・ダウンロードが
できるようになりました。
下記URLもしくは右のQRコードから
お申込みください。
<https://www.artpr.jp/sannomuseum/ecole-de-paris2025>



広報画像に関するご案内

このプレスリリースに掲載されている広報用画像①～⑪につきましては、画像データをプレス掲載用にご用意しております。また、読者プレゼント用招待券もご提供しております。「広報用画像使用申込書」に必要事項をご記入の上、FAXまたはe-mailにてご連絡くださいませ。

なお、「藤田嗣治」の作品は著作権保護がなされております。広報用画像素材として出品作品2点の画像をご用意しておりますが、ご掲載にあたりまして、使用の範囲などが著作権管理団体より定められておりますので、「**広報画像に関するご案内**」をご一読いただきました上でご申請ください。ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

[お問合せ先]

山王美術館

亀井 里香（かめい りか）

TEL 06-6942-1117

FAX 06-6942-8700

E-mail r-kamei@hotelmonterey.co.jp

藤田嗣治 | 広報画像に関するご案内

重 要

「藤田嗣治」の広報用画像につきましては、【紙媒体での掲載】に限り⑦⑧の作品画像をご利用いただくことが可能です。
ただし、以下のとおり使用に際しての範囲が別途定められております。
この範囲内においてご紹介いただける場合のみとなっておりますので、ご理解のほどお願いいたします。

（著作権使用にあたっての範囲）

○紙媒体の掲載のみに限ります。WEB媒体でのご掲載にあたっては、
別途著作権管理団体への使用許諾申請と使用料が必要となります。

○使用にあたっては、作品画像のちかくにクレジットを明記すること。

「クレジット番号」はリリース資料6Pの番号と異なりますのでご注意ください。

作家名、《作品名》、制作年、山王美術館蔵、

許諾クレジット(© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2024 G3547)

○展覧会情報に限定し、文字数が400字以内であること。

○作品の複製寸法 掲載サイズを50平方センチ未満にすること。

○原作品に忠実に複製使用すること。

全図にての使用をお願いいたします。

部分使用、作品への文字乗せやほかのイメージを重ねることはできません。

（その他の注意事項）

○作品画像の使用は本展を紹介する場合に限らせていただきます。

○展覧会終了後の画像使用はできません。

○掲載内容の事前確認のため、必ず~~ペラ~~を当館担当者までFAXまたはメールにてお送りください。

○掲載誌（紙）を当館宛に2部(冊)ご寄贈ください。

以上を遵守いただけない場合、問題が生じた際、主催者では一切責任を負いかねます。

ご留意のほど、よろしくお願いいたします。

なお、HP、携帯サイトなどへの二次使用につきましては、免除対象に含まれておりません。

画像使用はお控えください。

文章での紹介としていただければ幸いです（山王美術館ホームページへのリンク可）。

各媒体社のホームページ含め、WEB媒体での作品画像掲載にあたっては、

別途、著作権管理団体への使用許諾申請と著作権使用料が必要となります。

お問合せ先

一般財団法人 山王美術館

担当／亀井 里香(かめい りか)

TEL 06-6942-1117 FAX 06-6942-8700 E-mail r-kamei@hotelmonterey.co.jp

〒540-0001 大阪府大阪市中央区城見2丁目2番27号